

拙堂會報

発行所
齋藤拙堂頭彰会
事務局
津市大谷町 208-175
常務理事 中川禎二
Tel 059-226-2722

巻頭言 — 齋藤会長 —	1	拙堂今昔 (柳原)	6
拙堂会総会報告	2	会員一覧	7
拙堂生誕二百二十年記念 吟道詩舞大会	3	役員一覧	8
俳句・短歌の入選作	3	頭彰にふさわしい 催となる	8

今なぜ拙堂か

経世家拙堂の新時代への慧眼

漢詩文の大家、文豪拙堂の存在が津市民の誇りになるといふことは間違いない。しかし、より重要なことは拙堂が、極めて高い漢文力をもって内憂外患に対処する経世家として活躍したことをこそ誇りにすべきであろう。

内政において天保の大飢饉を予測し救荒策を提言、実施したことは多くの人々の知るところであるが、ここで強調したいのは拙堂が、対外問題に慧眼をもった、当時の数少ない知識人であったことである。

それを可能にしたのは彼が学んだ江戸の昌平黌の儒官古賀精里の教室が海外情報センターであったことによるであろう。また渡辺崋山の主催する蛮社グループにも属し、蘭学者や先見力のある学者や役人たちと海外事情を研究、漢文に翻訳された海外の書物や論文を驚くほど沢山読んでおり、その上で多くの啓蒙書を著わしている。

また拙堂はペリー来航の三〇年前から日本の海防はどうあるべきか

を真剣に考え、先ず蝦夷地を狙うロシアを警戒すべきことを説き、屯田兵の設置を提案、イギリスやアメリカの武力に対しては、攻める側の兵力と兵站到に限界があるとし、むしろ宗教をはじめとする文化的侵略による植民地化に対して警鐘を鳴らしている。

これは拙堂の偉大さの今日的意義と云えるのではないか。なぜならわが国が対外的に直面していることは拙堂の時代と今日を比べて、その本質においては少しも変わっていないからである。

世界の各国が自国優先であることは最近のアメリカ大統領に始まったことではない。わが国の国益を如何に守るか、拙堂に学ぶところは大きいと思う。

齋藤拙堂頭彰会会長 齋藤 正和

拙堂会総会報告

平成二十九年四月三十日開催

齋藤拙堂顕彰会の平成二十九年
 総会は、四月三十日十時からアスト津
 の橋北公民館会議室で開催され、会員
 総数129名(団体19・個人111)
 に対し、出席25名委任状85名で
 総会は成立、齋藤会長の挨拶に続き、
 加藤理事長を議長に選出し、次の議題が
 審議され満場異議なく承認されました。

事業計画

① 拙堂会報の発行予定

第2号 平成29年6月1日

第3号 同年12月1日

② 齋藤拙堂の遺跡巡り

平成29年6月4(日)

津駅西口9時受付 9時30分

出発―偕楽公園―四天王寺―比

佐豆知神社―津城跡 約4キ

ロ二時間の行程です。雨天なら

ば6月11日に実行。安濃津ガ

イドの案内によります。

③ 発足一周年記念大会

9月開催の予定。日時は後ほど。

④ 石水博物館展覧会

平成29年12月1日(金)～平成

30年2月4(日)

拙堂先生の遺墨、関係作品の展示。

齋藤会長と学芸員のギャラリートー

クが行われる予定。

⑤ 拙堂顕彰吟道大会と俳句・短歌・書

道の表彰。

平成30年3月予定。詳細は後ほど

⑥ 拙堂著「月瀬記勝梅溪遊記」の配布。

拙堂先生の代表作である『月瀬記勝』

の訳注文を増刷し、継続会員を含む

次年度会員に配布する予定です。

人事・理事・監事の異動。

総会において、飯田俊司氏・三藤治喜氏・

伊藤誠司氏・稲垣武嗣氏の四氏が理事

に就任、加藤宣雄監事が退任、理事を

退任された菅野克也氏が監事に就任さ

れました。なお総会後の理事会で飯田

俊司氏が副会長に就任されました。また、

杉野茂顧問が逝去されましたので当会

の顧問は現在、前葉泰幸氏と上田豪氏

の二名です。

総会付議事項

(1) 平成二十八年度事業報告

(2) 平成二十八年度決算報告

(3) 監査報告

(4) 平成二十九年度事業計画

(5) 平成二十九年度予算

(6) 会則改定

(7) 役員選出

拙堂生誕二百二十年記念

顕彰吟道大会

平成二十九年三月二十六日、拙堂の生誕二百二十年を記念して齋藤拙堂顕彰吟道大会が、主催津市吟剣詩舞道連盟・共催津市・後援齋藤拙堂顕彰会によって津市センターパレス二階の中央公民館ホールで開催されました。



加藤理事長・開会の挨拶

加藤理事長・前葉津市長のご挨拶の後、これを機に募集した『拙堂とその周辺』をテーマとした俳句・短歌の入選者の表彰があり、前葉津市長・加藤理事長・齋藤会長のほか協賛された各社の社長から賞状が授与されました。なお、入選作品の中で俳句5句・短歌5首が吟じられました。

吟道大会の吟詠では68の詩が披露され、そのうち拙堂先生の作品が30篇に及び、詩舞の熱演もあり午後四時、盛況裡に閉会しました。

俳句・短歌の入選作

齋藤拙堂の生誕二百二十年記念、俳句・短歌の募集は、俳句94句(応募者数52名) 短歌48首(応募者数15名)の作品が寄せられ、俳句は「津市民文化」俳句選者の山崎満世先生、短歌は短歌結社・青虹同人の杉野茂先生に選をお願いしました。



吟道詩舞大会 吟詠風景

なお、短歌選者の杉野先生は選考日(一月十六日)のほぼ一週間後に他界され、今回の選考が先生の最後の選となりました。

謹んで先生のご冥福を祈り致します。受賞作品と選者の選評は次の通りです。

俳句の部

津市長賞

津に拙堂ありということ天高し

松阪市 池田 緑人

吟詠 加藤 龍宗

選評 この津に拙堂翁という人がいた事。それだけで誇りに思える。としみじみ思いやった句であるが、「天高し」の季語の働きによってその偉業の深さと広さを表現している。

津市議会議長賞

入徳門入りし一步の冬木立

津市 成田 真喜子

吟詠 加藤 龍宗

選評 入徳門を入ると、寒々とした冬木ばかり。しかし冬木の力強さ、清潔さにも触れ、紅葉とは又違った美しさである。簡明な句であるが、印象的に入徳門を表現。

津市教育長賞

騎馬像の威風遙けし秋の風

津市 若林 宏幸

吟詠 加藤 龍宗

選評 騎馬像の風を切ってゆく威風に、高虎を偲んでみるものの、それも遙けきもの一つになってしまっている。秋の風の季語が人生こもごもをも沈める。歴史を感じさせる奥行のある作品。

津商工会議所会頭賞

城跡の開鎖なき門去年今年

津市 西沢 博子

吟詠 種田 真山

選評 今はもうあの頃のように開閉もなく城跡に残っているのみの門。長い年月への感慨が一年をつなぐ「去年今年」の季語に集約されている。現実を見据えた奥にある心情を描く。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

師の師拙堂わが師と仰ぎ冬耕す

松阪市 神戸 道子

吟詠 種田 真山

選評 この句は七、七、五の字余りの句であるが、リズムの良さが字余りを感じさせない。こつこつと冬の田畑を耕す姿に作者の真摯な気持ち伝わる。ミフジ株式会社社長賞

寒の鯉水面乱さず集り来

津市 富永 小百合

選評 お濠の寒鯉が静かに密かに寄ってくる。まるで水面の波一つさえ立たせないように。冬の城全景の張りつめた空気を捉えている。

株式会社刀根菓子館社長賞

春宵や黙して拝す拙堂碑

津市 駒田 博之



受賞者に賞状を授与する前葉市長

選評 桜も咲き始めた暖かい春の宵。拙堂の碑の前にただ黙って佇んでいると、言葉さえもいらぬ。何か満ち足りた思いに浸ることが出来る。

短歌の部

津市長賞

お城公園を紅葉めでつつも人を避け

「入徳門」くぐれば拙堂しのぼゆ

津市 村田 文男

吟詠 米田 豊山

選評 津城跡の紅葉狩りの雑踏を避け、藩校有造館の入徳門をくぐる。向こうに何もあつたわけではないが、そのせめてもの行為は拙堂門人と同じ。拙堂を慕う心がなさしめたものである。

津市議会議長賞

「在りし日」の祖母愛読の「梅溪遊記」

その拙堂の城跡に立つ

松阪市 森永 昌雄

吟詠 畠山 和

選評 「梅溪遊記」は月ヶ瀬の漢文紀行。拙堂の文名と梅の名所の名を天下

に知らせた。女の人にまで読まれていたとは。祖母・遊記・拙堂が一体となつて幼時の懐かしい思い出。

津市教育長賞

城跡にのぼり見下ろす津の街は雛に賑はふだいたての通り

津市 奥山 功(とむ)

吟詠 内藤 奉悠

選評 拙堂を慕つて俊才が集まつた学問の地。全国の旅人を迎えた地。残念ながらそれらはなくなつたが、商人が雛の段飾りを通行人に誇つた名残が見られる街の一面。懐かしい賑わい。

津商工議所会頭賞

大道をただひたすらに拙堂のあゆみし道に春三子峰(さんしほう)

伊賀市 世古 浩

吟詠 西田 徳水

選評 拙堂の「早に津城を発す」の七言絶句を踏まえている。原詩の「周道糸の如く」を上句に上手に訳し、この一首には拙堂の生き方が詠まれている。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

月明かり茶磨山荘に帰り来し拙堂の耳に伊唔の声満つ

薩摩川内市 齋藤 佐千子

吟詠 内藤 華博

選評 「伊唔」(いご)とは書物を読む声。

拙堂の留守中も弟子達は勉学に励んでいる。なかなか面白い一首。

ミフジ株式会社社長賞

あの世でも学びたき師と慕はれし齋藤拙堂は津藩に生まる

津市 駒田 博之

選評 「あの世でも」とは誰の言葉か。

兎も角この強い言葉が最後まで響き音調がそれを助けている。堂々たる一首。
株式会社刀根菓子館社長賞

養正の名なつかしみバス待てば沈丁花の香の町のしづけさ

津市 西沢 博子

選評 「養正」という好い名を持った町は作者の幼い思い出を持つ町でもあるのか。津は京都として最も静かな都会。そこが津の好きで住み易さとなる。

拙堂今昔・(柳原)

戦前の副読本によれば、拙堂は江戸柳原の津藩邸で生まれている。(会報第1号6頁)

古地図を見ると津藩藤堂家の上屋敷から西へ、ほど近い所に向柳原があり、神田川を隔てた対岸が時代劇などにしばしば登場する柳原土手である。当時、武家地には町名がなく、この一帯は「柳原」と呼ばれていたようである。

中段の写真は神田和泉町の由緒が書かれた表示板で、ファスナーとかアルミ建材でおなじみの、YKK本社の前に設置され、藤堂家が代々和泉守を名乗っていたところから、明治五年に神田和泉町と命名され、以後当地の正式名称となったことが記されている。

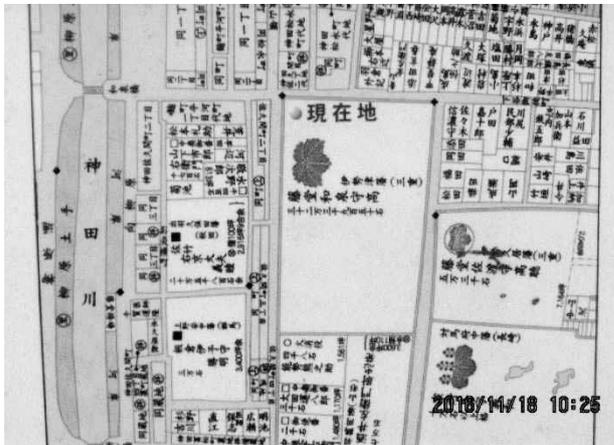
江戸詰め藩士であった齋藤家はこの広大な敷地内のどの辺りにあったか。例えば松阪城下の御定番屋敷のような

一面があつたのであろうか。いずれにしても、今となつては往時茫々の感なきを得ない。

とかく火事と喧嘩は江戸の華と言われる。喧嘩はさておき、藤堂藩上屋敷もしばしば火災にあい、拙堂自身も子供の頃に罹災したと伝えられている。



神田和泉町由緒書



古地図

左の図面は、この由緒書の揭示板に現在の地図と併記されていた古地図である。やや不鮮明であるが「現在地」がこの由緒書の立っている場所で、藤堂和泉守・高(石高)三十二万三千九百五十石の敷地の角に当たる。

拙堂、すなわち徳蔵少年が通った昌平巒は「現在地」からかなり西方にある。その「今昔」も訪ねたいことの一つである。(文責・塚澤正)

会員一覽(平成二十九年四月一日現在)

団体会員(順不同・敬称略)

- 伊藤印刷株式会社
- 岡三証券株式会社津支店
- 株式会社ZTV
- 株式会社百五銀行
- 株式会社百五総合研究所
- 株式会社百五デイーシーカード
- 百五リース株式会社
- 百五証券株式会社
- 株式会社ヘルシーファミリー
- 株式会社半泥子廣永窯
- 株式会社刀根菓子館
- (公) 日本吟道学院水心会
- (公) 日本詩吟学院津岳風会
- 三重交通株式会社
- ミフジ株式会社
- 二松学舎大学松苓会三重支部朋友会
- 錦水流淡翠吟詠会総本部
- 水远流詩吟朗詠会
- 藤貴流扇和会津支部
- 社会福祉法人三鈴会 さくら保育園

個人会員(順不同・敬称略)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|-------|-------|
| 秋田 健 | 飯田 俊司 | 石野 高廣 | 板谷 ツヤ子 | 伊藤 歳恭 | 伊藤 誠司 | 伊藤 鐮造 | 稲垣 武嗣 | 井上 明美 | 上島 正明 | 上田 豪 | 梅田 安春 | 海老原 初夫 | 大井 和人 | 大久保 守 | 大西 正弘 | 大平 日出夫 | 岡 重夫 | 奥田 榮子 | 奥田 則子 | 葛山 丕 | 勝眞 千代 | |
| 加藤 栄 | 加藤 宣雄 | 加藤 龍宗 | 金児 玲子 | 川合 俊平 | 河村 ツタ子 | 神田 弘 | 木崎 真陽 | 喜田 恭子 | 北畠 久子 | 木下 昇 | 雲井 敬 | 栗真 恵光 | 国府 昭男 | 児玉 進 | 粉川 孝英 | 小林 貴虎 | 近藤 博 | 齋藤 正和 | 齋藤 国子 | 齋藤 佐千子 | 齋藤 正晃 | |
| 齋藤 正人 | 下村 尚治 | 菅野 克也 | 杉浦 雅和 | 高倉 ふじ子 | 田中 礼子 | 田中 秀人 | 谷口 定男 | 種田 眞山 | 種田 啓子 | 田矢 修介 | 塚澤 正 | 塚澤 洋 | 土田 隆司 | 寺尾 正紀 | 富田 陽子 | 豊田 龍倭 | 内藤 華博 | 内藤 重芳 | 中川 禎二 | 中津 忠夫 | 中根 利彦 | 中野 清 |
| 中村 昭子 | 中村 美知子 | 中村 安彦 | 西川 幾子 | 西田 きみ子 | 野崎 耕治 | 長谷川 和秀 | 畠山 彦和 | 秦 周平 | 林 竹生 | 林 信吾 | 久森 忠信 | 深見 和正 | 福島 弘太郎 | 福 正直 | 藤岡 美也子 | 藤貴 静扇 | 淵脇 實博 | 別所 富貴子 | 本田 三千子 | 増田 幸恵 | 増田 廸子 | 松井 幸子 |

同	同	同	同	理事	常務理事	理事長	副会長	会長	役員一覧 (平成二十九年四月三十日現在)	森永	森永	森永	村田	村田	向坂	宮野	見並	水谷	水谷	水谷	松村
種田	小林	岡	稲垣	伊藤	中川	加藤	飯田	齋藤		昌雄	敏江	千寿	文男	修	和也	一郎	勤子	千春	忠文	忠弘	勝順
真山	貴虎	重夫	武嗣	誠司	中川	龍宗	俊司	正和			渡辺	若林	隆	米田	横山	山本	山崎	山崎	山家	山川	安村
同	顧問		同	監事	同	同	同	理事				宏幸	俊夫	豊山	清春	三千代	満世	龍雄	泉	雄三	久仁男
上田	前葉		藤貴	菅野	米田	三藤	水谷	塚澤			義彦										
豪	泰幸		静扇	克也	豊山	治喜	忠文	正													

拙堂生誕二百二十年記念吟道大会 顕彰にふさわしい催となる

大人詠うすばらしき詩あまたあり
吾ら吟いて永久に称えむ
龍宗

去る三月二十六日(日)津市中央公民館にて顕彰吟道大会が行われました。出吟者九十名、参観者約五十名の多くの参加者を得て行われた素晴らしい大会でありました。二十年前、生誕二百年を記念して吟道大会をと考えましたが、機熟さず実行できなかったことが昨日のように思えます。

津市吟剣詩舞道連盟の指導者の皆様のご理解とご協力により実現でき、心より感謝を申し上げます。又、顕彰会が設立されご後援を願ひ、津市のご理解により共催頂いたことは勿論のことです。この大会が継続されてゆくことを願っています。

拙堂は当代一級の漢詩人でありまし

た。中でも旅を愛し多くの詩を詠っています。一八二八年、三十一歳のとき、久しく江戸に上り、静岡潮見坂より富士の山を望み、輝かしい未来を見つめた青年拙堂の、意気揚々とした詩を紹介しましょう。

潮見坂にて富嶽を望む 齋藤拙堂
雪蓮天外 分明に認む
嶽麓 猶お遙かなり三日の程
東道の故人 君 最も旧し
雲を披いて 一笑遠くより相い迎う

訳詩
真白き富士 空遠く
遙か麓へあと三日
道のしるべか古き友
笑みながら吾迎う (理事長加藤龍宗)